

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
21	川崎市立 幸町 小学校	黒田 徹

学校教育目標	今年度の重点目標
<心豊かで 自ら学び 主体的に判断し 行動できる子どもの育成> ・やさしく 思いやりのある子 ・かしく 視野の広い子 ・たくましく 自分を鍛える子	1) 子供たち一人一人の存在の大切さを伝えていく 2) 知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度を一人一人に育てていく 3) 健康を意識し、健康で過ごせることに感謝する気持ちを育てる 4) 学校・家庭・地域が相互協力・相互連携し子供たちを育てる学校を共につくる 5) 子供たちの学校生活の充実を目指す教職員の研修、研究を進める

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 一人一人が輝き、尊重し合う学校(や)	・コミュニケーションを密に取りあい、感じ方、受け取り方の違いに触れることで、物事を多面的に捉えられるように、傾聴・対話を大切に活動を展開していく中で児童理解を行っていく。また、多様性を受け入れる校風づくりにも励んでいく。 ・少人数での意見交換、話し合い活動の機会などを可能な範囲で増やし、一人一人が相手の価値観も大切にしながら、自己肯定感や達成感を味わえるようにしていく中で、道徳、キャリア在り方生き方教育、国語科で育てた力を生かしていく。	・学習活動でも日常活動でも話し合いや意見交換を通して相手を意識し、自分の考えとの違いに気付くなど「あたたかい聴き方」ができる児童が増えた。また、話し方の定着により根拠を明確にした話し方が身に付いてきた。これは、国語科の研究の成果であると考えられる。 ・ほとんどの児童が自己肯定感をもち達成感を味わいながら学校生活を送っているが、一部の児童はそうでないというアンケート結果がある。 ・キャリア在り方生き方教育と関連付けた計画を検討する余地がある。 ・関わる良さを多様性に関係付けていく必要がある。	・「あたたかい聴き方」「やさしい話し方」の定着を図り、より一層相手を意識した言語活動を充実させる。そして、相手を理解し認め合えるあたたかい学級運営の中で、児童が自己肯定感を高められるよう支援していくことを徹底する。 ・キャリア在り方生き方教育を教科のどの部分と関連付けるか計画を再考する。 ・教師も子供も共通理解を図り、同じ方向を向いて活動できるようにしていく。(大きな問いと課題設定を子供の思考に寄り添って)
2 一人一人に確かな学力をつける学校(か)	・確かな学力を身に付けていくために、「かかわり」を大切に学力の向上を図っていく。「かかわる」ことで、様々な意見にふれ、色々なものの見方ができるようにしていく。このことで、学習する楽しさに気付いたり、学びを深めていったりする。 ・国語科の校内研究を通して、相手を意識した言語活動を充実させ、基礎基本の学力を定着させる。 ・GIGAスクール構想に沿った指導方法の研修、指導の実践をする。 ・学年の教材研究や交換授業、少人数指導等、個々の学びに向かう意欲増進、学力の向上を図る。	・校内研究として行っている国語科だけでなく他の学習でもいろいろなものの見方にふれ、楽しく学んでいる。一方、意見を発表するだけで、考えを発展させたり学びを深めたりすることは難しいという姿も見られた。 ・GIGA端末は学年に応じた活用の仕方での主体的な学びや対話的な学びに役立っている。 ・子供の主体性(何をどのように学びたいのか)を育むための問いを生むために、また、見方・考え方を通して学んでいくために、何とどのように関わっていくのか、教師の意識改革が必要になる。	・どの教科においても学年で協力して教材研究を十分行い、1年間又は6年間を見通した計画を立て、言葉にこだわった問い返しができるようにする。 ・GIGA端末のスタンダードを作成するなどルールを徹底して今後も活用していく。また、指導者としてのGIGA端末活用のスキルアップを図る。 ・教師も子供も共通理解を図り、同じ方向を向いて活動できるようにしていく。またファシリテーター役として実態把握を大切にしている。
3 一人一人が心身ともに健やかに過ごす学校(た)	・児童が安心してのびのびとした学校生活を送るために全教職員で児童と関わり褒め・励まし・指導・支援して情報を共有していく。 ・担当者が変わっても学校としての取組が引き継がれるよう、資料や、データの共有化を図っていく。 ・代表委員会や委員会では、児童のアイデアを大切に、自分たちで学校をよりよくしていくとする意識を高めていく。 ・たてわり班活動では、異年齢集団での活動に取り組むことで、発達段階に応じた資質・能力を育てていく。 ・クラブ活動では、異年齢集団の元、同じ目的をもって楽しく活動する。	・全職員が児童と関わるための情報共有シートなどを取り入れたが、共通理解が図れていない。 ・代表委員会では、コロナ禍であいさつが減っている現状から課題をもち、あいさつチャレンジデーを設定し、スタンプラリーカードを作るなど、学校をよりよくしていくとする動きが見られた。年間で継続していきたい。 ・委員会では、委員会集会を設けたことで、1～4年の児童にも活動の様子が伝わり、より意欲をもって常時活動や創意工夫を生かした活動への取り組みが見られた。 ・たてわり班活動では、6年生が最高学年としての姿を下級生に見せ、引継ぎの会を通して、5年生に伝えることができた。 ・クラブ活動では、異年齢集団における交流を通して、協力して楽しく活動したり、全校児童に発表したりすることができた。	・全職員が児童と関わるために、使いやすい情報共有シートなどを取り入れていく。またシートを活用しながら褒め・励まし・指導・支援していくという共通認識を高めていく。 ・あいさつ運動については、年間で継続して行えるよう計画していく。また、教職員が率先して全児童に挨拶をして、よい手本となっている。 ・引き続き、担当者が変わっても学校としての取組が引き継がれるよう、資料、データの共有化を図っていく。 ・たてわり活動、クラブ・委員会などで他学年と交流することを大切に、児童が自ら考えたり行動したりできる場面を意図的に設定する。
4 子供や保護者・地域とともに学び、信頼される開かれた学校	・「学校のやくそく」、「幸町スタンダード」をもとに、職員研修を行う。児童が自らの生活習慣を磨く。 ・「学校のやくそく」が必要な理由を児童に伝え、安全安心に学校生活が送れるようにしていく。特に変更になった項目については、繰り返し伝え、保護者にも理解してもらうようにする。 ・地域協力者・外部講師・ボランティアとの出会いを大切に、進んで関わり学ぼうとする教職員、子どもの姿を育てていく。	・「学校のやくそく」は全校に配付し、担任より学級指導を行った。また、児童の実態に合わせて見直しを行っていった。 ・コロナ禍で例年通りのあいさつ運動の規模を縮小したことをきっかけに、児童のあいさつがでなくなってきた。今年度は特活部会と協力し、あいさつ運動に取り組んだことで、明るくあいさつの声が少しづつもどってきた。 ・生活アンケートは、児童の実態を知る資料として役立たせるとともに、聞き取りも必ず行い、児童の小さなサインを見落とさずに指導にあたった。	・「学校のやくそく」が必要な理由を児童に伝え、安全安心に学校生活が送れるようにしていく。特に変更になった項目については、繰り返し伝え、保護者にも理解してもらうようにする。 ・「幸町スタンダード」については今後も研修を行い、教職員の共通理解を図っていく。児童の実態に合うかどうか部会で見直しを続けていく。 ・今後も保護者・地域には、情報発信を続け、できるだけ、学校の取り組み・児童の様子を伝えていき、家庭に協力を仰ぐ。
5 学校における働き方改革を進め、子供も教職員も生き生きとした学校	・共助の気持ちをもって仕事を進めていく教職員の関係作りをする。 ・効率的よく働くための具体的な策を持ち寄り、それをGIGA端末で全教職員が共有できる「働き方知恵袋」を作った。その策は、学年会で教科指導・評価方法・児童指導などをその都度話題にして挙げていった。 ・定時退勤を促すポスターを職員室に掲示し、勤務時間以外の労働を減らせるよう、働き方についての意識改革を図っていく。 ・勤務時間以外の労働を減らすことができない原因を追究し、改善していく。	・学年会などで指導方法や経験を伝え合い、情報を共有する機会を設けた。 ・「働き方知恵袋」を共有することで効率的な働き方を学べたり、「定時退勤を促すポスター」を作成したりして、ポスターが目につくことで働き方について見直す機会となった。 ・快適に仕事ができるような取り組みや改善点などについて話し合った。実際に取り組めそうなものについて、取り入れるように努めたが、時間の確保にはなかなかつながらず、時間外労働をしていることが多々あった。	・学年会だけでなく、各部会で教科指導・評価方法・児童指導などをその都度話題にし、全教職員での共通理解を図り、教員の底力を上げていくようにする。 ・ICTを活用し、効率よく円滑に職員間の情報共有が図れるようにする。また、ICTの活用で業務の改善が図れるものないか、情報部会と共に考えることも検討していく。 ・時間外労働の主な内容は学年会や学級事務(教材研究等)である。この辺りの折り合いのつけ方について、原因を追究し改善方法について検討していく。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
・子供たちが元気に活動できているのがよかった。インフルエンザ等で学級閉鎖、学年閉鎖をしたようだが、子供たちも学校に戻ってこられてよかった。 ・体育館改修工事が予定通り進んでいて安心した。卒業式には間に合うとの事。新しく、きれいな体育館で6年生を送り出してあげたい。 ・防災対策について、地域も巻き込んで対策を立てる必要がある。(元日の能登地方の地震を受け)休日や夜間に地震が起きた時の対応について、行政とも連携して考えていきたい ・地域人材とのつながり。学校担当者が異動してもつながりが切れないような工夫を。このようなつながりから顔の見える関係を作り、子供たちが地域の人へ挨拶できるようにするといふ。	・国語科の研究推進役を受け、市内に向け本発表をした。この研究に取り組んだことで、教師一人一人が自分の授業に正面から取り組み、教材研究の仕方や指導案の書き方など、教職員としての基礎基本の力を身に付けることができたと思う。教師が自身の経験から授業を行うのではなく、現行の学習指導要領に則った授業を心がけていくことを今後も常に心掛かせたい。 ・様々な場面で見られる教職員の質の低下について、校内の研修(ド・ミニ)研修・OJT研修等)を取り入れた。十分とは言えないので、次年度も取り組みたい。 ・今年度はほぼ、制限を設けることなく授業を公開することができた。その一方で、これまでは混雑を避ける方法で授業参観等を行っていたので、コロナ禍前の風景に教員の方が抵抗感を持っていた。時期を見ながら公開の在り方を考えていきたい。 ・様々な理由で、年度当初から不登校児童の数に変化が見られた。個々の実態を正確に把握し、校内で情報共有、学校とのつながりをもつようにしたい。